

ゼロ次元前史

石崎 尚（愛知県美術館学芸員）

はじめに

ゼロ次元は、1960年代に過激なハプニングで一世を風靡した美術家集団である¹。愛知県名古屋市でスタートしたこのグループは、いわゆる「地方の前衛」の代表的な存在として、とりわけアングラの傾向を持つ芸術表現を論じる際に言及されることが多かった。しかし残念ながら、愛知の美術史の中でこのグループを位置付けようという動きは、これまで活発だったとは言えない²。また近年では、黒ダライ兎による一連の研究がこのグループの全貌を明らかにしたが、ゼロ次元がどのようにして生まれたのかという経緯については、いまだ詳らかでない部分が少なくない。本論は、このように依然として不明確な部分のあるゼロ次元の結成の事情について、可能な限り一次資料と関係者へのインタビューに基づいて記述しようと試みるものである。これによってゼロ次元という集団が生まれた複雑な経緯を多少なりとも明らかにするとともに、彼らがどのようにして愛知の美術シーンの中から生まれ出たのかを説明することを目論んでいる。

先行文献によるゼロ次元の結成時期

先にゼロ次元結成の経緯については不明な部分が少なくないと記したが、例えばゼロ次元がいつから活動を開始したのか、という基本的な情報に関しても、これまでの文献では複数の情報が入り混じっている。試

- 1 本稿では、1963年以降に活発にハプニングを行うようになって以降のグループ名を示す際は、現在一般的に流通しているゼロ次元というカタカナ表記を使用する。0次現（0次元）は後述するように、ハプニング集団として生まれ変わる前のグループ名および彼らの展覧会名に限定して使用する。なお、印刷物で確認できるカタカナ表記のゼロ次元の初出は、1962年10月の第3回ゼロ次元展の案内ハガキである（図1）。また、数字表記の0次元の初出は、1963年1月1日の這いずりハプニングの際に配布したビラである（図2）。その後は、彼ら自身による印刷物でもカタカナ表記と数字表記は混在している。
- 2 貴重な例外として下記の論考がある。三頭谷鷹史「1945～1969 中部の美術水脈」『REAR』24号、リア制作室、2010年、90-96頁。なお、三頭谷はこの中で短いながらもゼロ次元結成の経緯について概略を述べている。

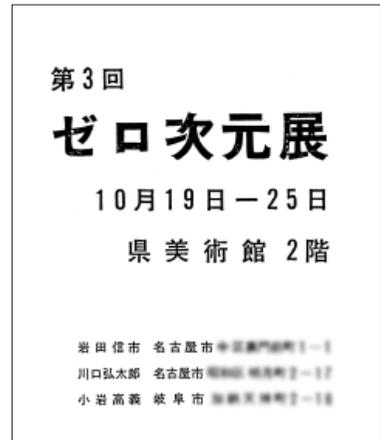


図1 第3回ゼロ次元展案内ハガキ、1962年、個人蔵

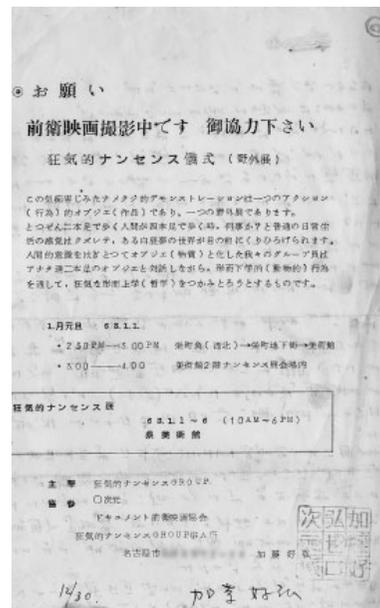


図2 狂氣的ナンセンス儀式ビラ、1963年、個人蔵
©ゼロ次元・加藤好弘アーカイヴ

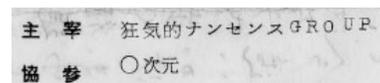


図2 部分（拡大）

みに、彼らの活動時期について記載された資料を引用してみよう³。なお、これは単に様々な情報が入り乱れていることを例示するためであり、これらの文献の誤りをあげつらう目的ではないことは言うまでもない。

①0次元〈加藤好弘、岩田信市ら〉1964年—⁴

②ゼロ次元の結成は1958年名古屋とされるが、初期の月例「儀式」は記録がなく、数人で盛り場を芋虫のように這いずり回ったと伝えられる。東京では第15回「読売アンデパンダン展」(63)での行動から知られるようになる⁵。

③「ゼロ次元」として動き始めたのは、名古屋の栄町でハプニングをやった1963年頃だと思う⁶。

④儀式集団「ゼロ次元」が誕生したのは、63年の元旦である。この日、加藤好弘、岩田信市、小岩高義など、多数の美術家たちが、名古屋の栄町から旧愛知県美術館まで、腹ばいになって行進した⁷。

⑤この周辺で最も話題となり、マスメディアでも盛んに取り上げられ脚光を浴びたのは、名古屋出身の加藤好弘、岩田信市らによって一九六三年前後に結成されたとされる「ゼロ次元」がある。「人間の行為をゼロ時間として無為に導く」ことを標榜したこの前衛芸術集団は、公衆の面前で裸体になることにとりわけ執着を示し、これを「儀式」と称して全国で数百回におよぶパフォーマンスを繰り広げた⁸。

⑥ゼロ次元 1960年代に活動したハプニング集団。全国に300名以上のメンバーがいるとされたが、主催者の加藤好弘を始め岩田信市、糸井貫二（ダダカン）、秋山祐徳太子など一部を除けばその素性は不明。デモ行進など、もっぱら反社会的な街頭活動で自らの存在をアピールし、ネオ・ダダ、九州派、時間派など当時の反芸術活動の中でもその表現は最も過激だった。反万博闘争で加藤が逮捕されたのを期に終息⁹。

3 本稿では英語文献の引用を省略するが、例えばReiko Tomii, "After the 'Decent to the Everyday': Japanese Collectivism from Hi Red Center to The Play, 1964-1973," in *Collectivism after Modernism*, ed. Blake Stimson and Gregory Sholette (Minneapolis: University of Minnesota Press, 2007), 44-75ではゼロ次元の結成を1959年頃とし、Frédéric Alix, *Pornologie vs capitalisme : Le groupe de happening Zero Jigen, Japon 1960-1972* (Dijon: Les Presses du réel, 2013)では1960年代としている。

4 「日本列島＝前衛グループ・ガイドマップ」『美術手帖』Vol.20 No.296、1968年4月号、美術出版社、85-86頁。

5 高島直之「行為の軌跡 [日本]」『美術手帖』Vol.37 No.551、1985年10月号、美術出版社、77頁。

6 岩田信市「『ゼロ次元』発生、活動、パワーの根源」『裸眼』第3号、美術読本出版、1986年、10頁。なお、『裸眼』第3号にはゼロ次元の結成に関する記述が複数あるが、ここでは簡潔に引用できるものとして岩田の記述を採用した。

7 三頭谷鷹史「ゼロ次元」浅井俊裕、大橋浩美編『日本の夏—1960-64』水戸芸術館現代美術センター、1997年、65頁。

8 樫木野衣『日本・現代・美術』新潮社、1998年、178-179頁。

9 多木浩二・藤枝晃雄編『日本近現代美術史事典』東京書籍、2007年、557頁。

⑦〈ゼロ次元〉は創立当初からパフォーマンス集団だったわけではない。1960年6月に川口弘太郎、小岩高義、梅田正雄、そして岩田信市という4人の名古屋の若い美術家たちによって結成され、同年9月に愛知県文化会館美術館で最初のグループ展を開いた〈0次現〉がその起源である。当初は川口の案で〈0次元〉にするはずだったが、小岩、梅田との話し合いで「ゼロの次に現す」という意味の〈0次現〉になり、62年10月の第3回展（岩田はこのときから出品）で〈0次元〉に改称される。この間、川口、小岩らは、59年に名古屋に戻って教員を始めていた加藤好弘ら多摩美術大学卒業生たちと、60年9月の「名古屋青年美術展」で合同、のち加藤、岩田、小岩らを中心とする先鋭なメンバーが62年後半から〈0次元〉の主導権を握り、「儀式集団」へと移行していく¹⁰。

⑧ゼロ次元は岩田信市らが1960年頃に名古屋で結成し、後から東京の加藤好弘らが合流しました。1963年以降、「毎月の定時日にまるで女性のメンスのように」東京や名古屋の人の集う街頭各所で集団による「儀式」を実践するようになりました¹¹。

このように、ゼロ次元の開始時期については1964年、1958年、1960年、1963年など様々な情報が入り混じっている。無論、発行が後のものになればなるほど、研究の進展にともしない情報が正確になっていると考えられるが、それにしても活動の開始時期という基本的な情報ですら、1958年から1964年まで6年も幅があるのはどうしてだろうか。考えられる第一の理由は、ゼロ次元が、具体美術協会や九州派が活動当初から発行したような機関誌を作らなかったことにある¹²。それゆえに公式的なグループの歴史を記録に残す機会を持たぬまま、活動にのめり込んで行ってしまった。第二の理由は、第一の理由とも関わってくるが、グループの結成が紆余曲折を経た複雑なものだったことが考えられる。機関誌等が発行されなかった背景には、単にそのような関心や時間的な余裕がなかったというだけでなく、グループの歴史について詳細に記述することが憚られたという背景も推察できるのである。

以下の章では、複雑な説明になってしまうことを厭わずに、可能な限りゼロ次元の結成に至る流れを詳述していく。なお、先に引用した先行文献でも明らかなように1963年1月1日の這いずりハプニングをもって、ハプニング集団としてのゼロ次元が本格的に始動したというのが衆目の一致するところである。本論もこの見解を引継ぎ、1963年元旦を区切りとして、そこに至るまでの活動に焦点を当てる。

青年美術家協会の発足

ゼロ次元結成の経緯を記述する上でその起点とすべきは、青年美術家協会という組織である。青年美術家協会は1957年に、多摩美術大学油画科に在学中の学生有志によって結成

10 黒グライ兒『肉体のアナーキズム 1960年代・日本美術におけるパフォーマンスの地下水脈』grambooks、2010年、356頁。

11 中ザワヒデキ『現代美術史 日本篇 1945-2014 改訂版』アートダイバー、2014年、50頁。

12 機関誌『具体』は具体美術協会結成の約5か月後の1955年1月1日に創刊、一方の機関誌『九州派1』は九州派結成の約2か月後の1957年9月1日に発行と、それぞれ結成間もない時期に機関誌が刊行されている。

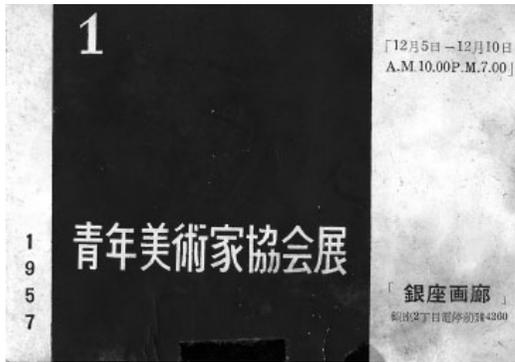


図3 第1回青年美術家協会展案内ハガキ、1957年、個人蔵



図4 第3回青年美術家協会展パンフレット、1958年、個人蔵

された¹³。興味深いのは参加者がほぼ、その時点での3年生だけで構成されている点である。発起人である内藤圭介によれば、他の学年にはこうした動きに賛同するものがいなかったという¹⁴。結果的にこのグループには1936年前後に生まれた学生が多数集まることになった。彼らは第1回の青年美術家協会展を、1957年12月5日から12月10日まで銀座画廊で開催(図3)¹⁵。続いて第2回(1958年7月3日から7月8日まで)、第3回(1958年11月12日から11月17日まで)、最終回となった第4回(1959年5月11日から5月16日まで)と計4回の青年美術家協会展が同じ銀座画廊を会場に、ほぼ半年に1度のペースで行われた。彼らが第3回展に際して発行したパンフレット(図4)には、下記のマニフェスト的な文章が載っている。

ここに集る我々は当時代の持つ共通した気運と意^{こころばえ}に積極的に参加した三〇人によつて形成された。我々は混立する所有既成の概念から退躍し自身の醸し出すスペースを持ち多くの可能性と多角的な働き掛けによつて一つのエコールとして発展して行くであろう。—アトム^{ママ}の炸裂以後の赤裸々な世界しか知らない我々は幕の上がつてしまった芝居を観ている様なものだ—

これに加えて、協会の活動を支援する末松正樹(1908-1997)¹⁶、針生一郎(1925-2010)、江川和彦(1896-1981)の3人¹⁷によるコメント、さらにはメンバーによる懇談会(討議)の抜粋、そして名簿が載っている。名簿には石田琴次(1936-2013)、大津昭、長田良平、

13 石黒鏞二や佐々木豊など東京藝術大学の学生も一部含まれていたが、彼らは愛知県立旭丘高校で成瀬光男と同級生だったために誘われたのだと考えられる。なお、石黒、佐々木、成瀬に那須勝哉(1936-)を加えた黄道四人展が、1956年3月に名古屋の文天堂画廊(桜画廊の前身)で開催されている。『成瀬光男画集』、オフィス・ワイ、1998年、199頁。

14 筆者による内藤圭介へのインタビュー、2018年4月20日。

15 銀座画廊は九州派(1958年8月、1959年8月、1960年8月、1960年9月)やネオダダ(1960年4月)も会場に使用した画廊で、銀座2丁目電停前という住所が記載されている。2階が銀座画廊で1階部分はキャバレーだったという。

16 本論では初出する作家および美術関係者の生没年を、可能な限り記載するように努めたが、不明な者に関してはこの限りではない。

17 末松は当時、多摩美術大学で教員を務めていた。また針生と江川は、内藤との個人的なつながりで依頼したという。筆者による内藤圭介へのインタビュー、2018年4月20日。

遠藤明夫、小畑勉（1936-2005）、加藤好弘（1936-2018）、片倉茂男、小杉繁良、小華和為雄（1936-）、佐伯宗利、高橋満、田中照子、谷口承、鶴見雅夫（1936-）、塚本隆造、土肥基家、内藤圭介（1936-）、中森陽二、成瀬光男（1935-）、兀下巖（1937-）、福本智雄（1936-）、光延博愛（1937-）、望月計男（1935-2015）、山本健司、山田実、石黒鏘二（1935-2013）、佐々木豊（1935-）、葵正、という28名の住所と名前が記載されている。の中には加藤好弘と兀下巖という、後のゼロ次元の主要メンバーが含まれている。しかしながら、事務局は内藤圭介と鶴見雅夫が務めていたことから¹⁸、加藤と兀下は必ずしもこの協会の中心的な存在という訳ではなかったようだ。第3回展が行われた1958年と言えば1956年11月の「世界・今日の美術展」を契機とする、いわゆるアンフォルメル旋風が日本の美術界を直撃した時期である。読売アンデパンダン展にもアンフォルメル風の作品が多数出品されたというから、若い学生たちも当然の事ながらこの影響を受けたことは想像に難くない。一方で、宣言文にあるアトム炸裂、つまり広島・長崎の原爆に対する言及は、彼らの意識の出発点が敗戦後の日本の姿にあったことを示している。懇談会の内容については、抜粋されたコメントが並んでいるだけなので議論の方向性が分かりにくい、「公募展なんかマスターベーションだよ（笑）」、「青美協はジェット機だ。そこに積まれている爆弾をどう核爆発させるかだ」、「とにかくこのグループは今の段階では無意味だ。この会はもうすぐつぶれる。そうなる様に仕向けているのだ」などの発言からは、公募展を否定している事や、協会の存在意義について賛否両論が渦巻いている事などが読み取れる。

名古屋巡回展と名古屋青年美術の独立

さて、青年美術家協会¹⁹には加藤好弘、鶴見雅夫、内藤圭介、成瀬光男、兀下巖、石黒鏘二、佐々木豊という具合に、どういう訳か愛知県出身者が多く含まれていた。そのことによる自然な流れとして、第3回展を名古屋に巡回させるという企画が持ち上がったようだ。第3回展の名古屋巡回展は残されている案内ハガキ（図5）によれば東京展の一ヶ月半後、1959年1月1日から1月6日まで愛知県文化会館美術館で行われている。この愛知県文化会館は1955年2月2

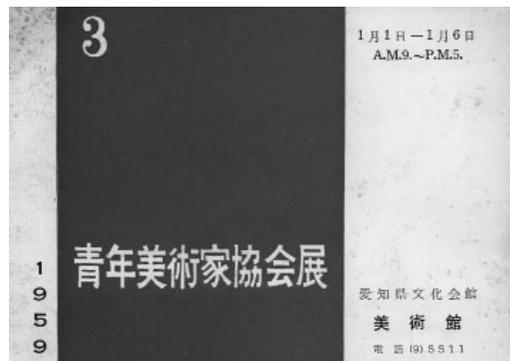


図5 第3回青年美術家協会展（名古屋巡回展）案内ハガキ、1959年、個人蔵

日に名古屋の中心地、栄にオープンした複合文化施設で、美術館と図書館、さらには音楽や演劇などのための講堂を備えていた。美術館は貸会場を主な業務としてスタートした

18 筆者による内藤圭介へのインタビュー、2018年4月20日。また、第1回から第4回まで展覧会の案内ハガキには、全て事務局として内藤圭介の名前と住所が記載されている。

19 京都には1954年に結成され、「青美」と呼ばれる前衛集団の「京都青年美術作家集団」がある。青年美術家協会と京都青年美術作家集団の間には直接的なつながりはなかったと考えられるが、青年美術家協会に名を連ねた塚本隆造は、後に「具現」のメンバーとして、京都青年美術作家集団など複数の集団と合流して美術集団「現青」に参加している。京都の「青美」および「現青」については坂上しのぶによる下記のサイトを参照した。http://shinobusakagami.com/art/art-05/707/（2019年2月4日閲覧）



図6 愛知県文化会館美術館（外観）

が²⁰、この地では戦後一番早くオープンした近代的な展示スペースであり、手頃な金額で借りられる展示会場としてこの地域の実業家たちに愛用されていた（図6）。

この名古屋巡回展の案内ハガキには、事務所として鶴見雅夫の東京の住所とともに、名古屋事務所として加藤好弘の実家の住所が記されている。また、後援に中部日本新聞社と名古屋タイムズ社が入っているのも注目に値する。彼らが借りた愛知県文化会館美術館のスペースと、元の銀座画廊が広さの点でどれ程異なるのかは定かではないが、巡回の際には作品が足りず内藤が個展の出品作を全て送り、兀下は急遽即興で作品を10点程制作し、何とか間に合わせたという²¹。この巡回は、愛知県出身者が故郷に錦を飾るといったような意味もあったかもしれないし、あるいは東京で生まれた若い前衛のパワーを愛知にも伝播させようという意図もあっただろう。ただし後にゼロ次元に参加する加藤、兀下らの目線から見た時に、この第3回展の名古屋巡回は大きな意味を持っているように思われる。というのも、この3か月後、加藤は多摩美術大学を卒業して地元に戻り、名古屋の若葉中学校の美術教諭として着任、兀下も同年の9月に同様に、清須の新川中学校の美術教諭として勤め始めるからである。つまり第3回展巡回の意図は、大学卒業後に故郷の愛知に戻ってからも彼らの作家活動を継続させるための足がかりとして、ある程度軌道に乗っていた青年美術家協会を愛知に持っていききっかけ作りだったとも考えられるのである。

その後、1959年5月11日から5月16日までの第4回展（銀座画廊）に2人が参加したかどうかは不明だが（加藤は卒業後で、兀下のみ在学中）、加藤旧蔵の資料の中に案内ハガキなどが見当たらないために、彼らは参加しなかったものと推測される。少なくともこの第4

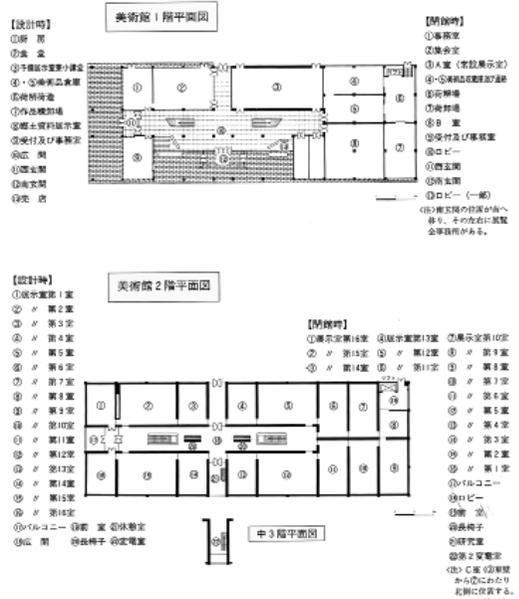


図6 愛知県文化会館美術館（平面図）

20 美術コレクションを全く持たなかったわけではない。開館前の1952年にはコレクション第1号として藤井篠《紅白梅の図》を購入し、翌年には藤井達吉関連資料一式を受贈。また、1961年には美術品購入費として500万円の予算がつき、本格的な収集を開始した。しかしながら、展示室に関してはごく一部の美術館主催の展覧会を除けば、やはりその実態はレンタルスペースが主体であった。

21 筆者による内藤圭介へのインタビュー。2018年4月20日。作品が足りないという事情から推察するに、既にこの時点で巡回展の出品作は愛知県出身者のものだけだった、つまり東京展の内容とは異なっていた可能性がある。

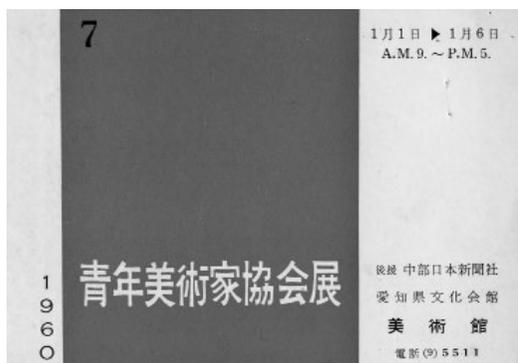


図7 青年美術家協会展（名古屋展）案内ハガキ、1960年、個人蔵



図8 撮影者不詳、青年美術家協会展（名古屋展）における加藤好弘の出品作（記録写真）、1960年、愛知県美術館蔵

©ゼロ次元・加藤好弘アーカイヴ

回展は名古屋には巡回しなかったようである。その代わりに、この第4回展の巡回ではない形で1960年1月1日から1月6日まで、青年美術家協会展が同じく愛知県文化会館美術館で開かれ（図7）、加藤はアンフォルメル風の抽象絵画を出品している（図8）²²。情報誌に掲載された展示の告知を信頼するならば²³、この時に参加したのは片倉茂雄、小華和為雄、谷口承、鶴見雅夫、成瀬光男、藤井孝次郎（1937-）、山本健司、山田実、福本智雄、安藤真寿男、長田長平、竹内寿郎、加藤好弘、石田琴次、板倉靖樹（1935-）、西村清夫、清島明、岸本清子（1939-1988）、石黒鏘二、宮下勉、桑原佐吉（1940-2004）、小笠原健、筒井明、望月計男、塚本隆造、内藤圭介、元下巖の計27名である。メンバーの入れ替わりがかなりあるが、特に当時まだ多摩美日本画科の1年生だった岸本清子の参加が目を引く。

展覧会の案内ハガキに事務局として記載されているのが鶴見、加藤の住所であるのは前回と変わらない。にもかかわらず何故この展覧会が第4回展の巡回ではないかという、第3回展の際は東京展も名古屋展も案内ハガキの左上に3という数字が書かれていたのだが、第4回東京展のハガキは4、そしてこの60年1月の名古屋展のハガキにはどういふ訳か7と書かれているからだ。恐らくこの前後のことだと推測されるが、青年美術家協会展を名古屋で開催することに関して、愛知県出身者以外のメンバーから苦情が出たようである。要は多摩美とは関係のない愛知在住の作家を加入させて、愛知勢だけで好き勝手にやるのであれば、青年美術家協会という名称を使うな、ということだったらしい。加えて青年美術家協会が使っていた大きな垂れ幕（図9）を名古屋会場でも掲げようと思ったところ、東京側のメンバーが貸すのを断ったというような小競り合いもあったようだ²⁴。

そのため、加藤らは青年美術家協会という名称を使うのをやめ、1960年に新たに名古屋青年美術というグループで展覧会を立ち上げる。その際に発行したリーフレットには、安藤真寿雄、浅井永子、伊藤博、井上潤一、※石黒鏘二、稲葉桂（1937-2016）、岩原良仁

22 愛知県文化会館美術館が発行していた広報誌にも、青年美術家協会展の予告が載っている。『美術館ニュース 窓口』第51号、愛知県文化会館美術館、1959年、8頁。

23 『ART TIMES』Vol.2 No.1、現代美術出版社、1960年、3頁。

24 筆者による内藤圭介へのインタビュー、2018年4月20日。

(1937-)、☆伊藤孝夫 (1941-)、☆梅田正雄 (1937-)、梅村孝之 (1933-)、江場康秀、奥村徹 (1936-)、秋田淳之助 (1938-2009)、小笠原健、※☆加藤好弘、加藤大博 (1936-)、☆川口弘太郎 (1936-)、☆岩田信市 (1935-2017)、小本章 (1935-2017)、☆小岩高義、小島健志、小瀬垣宏郎、清島明、鈴木旭、鈴木みのる、竹原裕、高橋良英、塚本英一、筒井明、※成瀬光男、中島和郎、野々部療、※☆元下巖、波多野正、平井昌昭、日比忠男、☆水野光典、宮下勉、山田美瑛、渡辺桂子、鶴田辰生、村瀬慶高、後藤嘉夫、竹内寿朗、桑原佐吉、成田光鋭という46人の名前が記載されており、事務局は変わらず加藤が務めている。この中には青年美術家協会からの継続メンバーが4名おり（氏名に※を付した）、また後のゼロ次元に参加した者が7名いる（氏名に☆を付した）。青年美術家協会からの継続者が46名中の4名ということで、ほぼメンバーが一新されているのが分かる。また、岐阜在住の小本章と小岩高義以外のほぼ全員が愛知県在住者であり、さらに9割以上が名古屋市在住者である。ちなみに小本章は、前年の1959年に結成された岐阜の前衛美術集団VAVAのメンバーだが、VAVAの他のメンバーが参加せず小本だけが名古屋青年美術に参加した理由は分からない。

その他のメンバーに関しては愛知学芸大学（現在の愛知教育大学）の学生や卒業生が多い。1949年に開学した同大学は旧師範学校が元になって設立された教員養成のための大学だが、当時は愛知県内で唯一美術を学べる大学であった。そのため、愛知という土地に根付いた組織として再スタートを切る際に、同大学の関係者を多数呼び込んだのは自然な流れだろう。なお、伊藤孝夫は高校3年生だった1959年に、栄のシマモト画廊が主催していたヌードデッサン会に参加し、そこで加藤好弘に出会い、加藤からの依頼で愛知学芸大に進学後の同級生に参加を呼びかけたという²⁵。また、名古屋青年美術には団体展の作家も多く参加していた²⁶。

この名古屋青年美術の第1回展は、1960年9月19日から9月24日まで、同じく愛知県文化会館美術館で開かれている（図10）。この時、加藤は（写真で確認出来る限りでは）少なくとも5点の抽象絵画を出品したようである。その内の2点は白っぽい色が画面をオールオーバーに覆い、荒いマチエールが用いられている点で、同時代の絵画の影響を多分に



図9 撮影者不詳、青年美術家協会展の垂れ幕、個人蔵

25 筆者による伊藤孝夫へのインタビュー、2017年12月21日。

26 各団体から選抜された作家による展覧会として、第1回選抜展が1961年8月9日から8月20日まで愛知県文化会館美術館で開催されたが、名古屋青年美術からは岩原良仁、加藤大博、小本章、江場康秀、塚本英一（以上、新制作協会）、水野光典（新世紀美術協会）、梅村孝之、小瀬垣宏郎、波多野正（以上、創元会）、稲葉桂（行動美術協会）の10名が参加している（所属団体は当時のもの）。

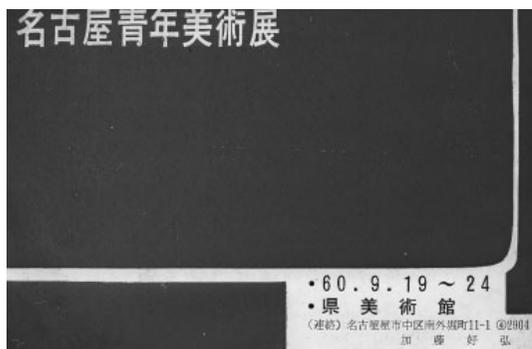


図10 第1回名古屋青年美術展案内ハガキ、1960年、個人蔵



図11 撮影者不詳、第1回名古屋青年美術展会場風景写真（左と中央の2点が加藤好弘の出品作）、1960年、愛知県美術館蔵
©ゼロ次元・加藤好弘アーカイヴ



図12 撮影者不詳、第1回名古屋青年美術展会場風景写真（加藤好弘の出品作部分を拡大）、1960年、愛知県美術館蔵
©ゼロ次元・加藤好弘アーカイヴ



図13 撮影者不詳、第1回名古屋青年美術展会場風景写真（兀下巖の出品作）、1960年、愛知県美術館蔵
©ゼロ次元・加藤好弘アーカイヴ

感じさせるものである（図11）。また、《作品C》という題名の別の作品の画面にはアルファベットの文字が見られるのだが、これは梱包用の麻袋（ドンゴロス）を画面に貼りこんだものようだ（図12）。また、円形が折り重なっていくパターンで描かれた兀下の抽象絵画も3点確認できる（図13）。

その後、名古屋青年美術は第2回（1961年1月1日から1月7日まで）、第3回（1962年1月1日から1月6日まで）と同じ場所で展覧会を重ねる。青年美術家協会展の巡回展以降、毎年1月1日から展覧会を行っていたことを考えれば（教員をしていた加藤や兀下にとって年末から年始にかけて準備や展覧会を行う方が、仕事への負担が少なかったのだろう）、名古屋青年美術の第1回展だけが9月に行われているのは奇異な印象を与える。これはやはり青年美術家協会から独立する際のゴタゴタがあり、なるべく早く名古屋で新しい組織を立ち上げたいという焦りが、この通常とは異なる会期での開催に結び付いたのではないだろうか。青年美術家協会の結成から名古屋青年美術の独立までを表にすると下記のようになる。

青年美術家協会展		名古屋青年美術
東京展	名古屋巡回展	
第1回：1957年12月5日～12月10日		
第2回：1958年7月3日～7月8日		
第3回：1958年11月12日～11月17日	第3回：1959年1月1日～1月6日	
第4回：1959年5月11日～5月16日		
	第7回？：1960年1月1日～1月6日	第1回：1960年9月19日～9月24日
		第2回：1961年1月1日～1月7日
		第3回：1962年1月1日～1月6日

0次現の結成

次に、若干時系列が前後してしまうが、名古屋青年美術とは別のグループである0次現について述べよう。0次現という名称が示すように、このグループもまた後のゼロ次元の母体となった集団だからである。

0次現は青年美術家協会よりも少し遅れて1960年6月5日に、岩田信市、梅田正雄、川口弘太郎、小岩高義という4人によって結成されている²⁷。川口、岩田、小岩は名古屋市立前津中学校の同級生であり²⁸、さらに岩田、小岩、梅田は旭丘高校美術科の同級生という人脈の中から生まれたグループである²⁹。梅田は武蔵野美術大学を中退、川口は多摩美術大学を中退、岩田は結核のため自宅療養中、というように、それぞれ比較的自由な身であった。そのため、美術を通じて自分たちも何かを新しいことをやろう、というような運びになったらしい。グループ名称については川口による下記の回想が残されている。

『ゼロ次元』の名称は、何か新しい価値の美術的表現を行うことについて、それを象徴する明快な名称がないかと小岩と話し合いました。どんな名称を考えたか記憶にありませんが、最終的に僕の考えで『ゼロ次元』と決定しました。名称の直接的なヒントは、その頃手元にあったクリフトン・ファディマン編、三浦朱門訳の『第四次元の小説』という、荒地出版社から出ていた本でした。自分たちは何も無いところから出発する。我々には反抗すべき権威もない。参加に値する組織もない。我々が行う美術運動あるいは活動によって得られるであろう地位もない。新しい表現を志す者が参加することに何の制約もない。といった個と個のぶつかり合いの場にしたいということの表現でした。いわば積極的な無にたいする僕個人の関心の表れが下敷きになっていたかもしれません。(略)小岩と梅田、僕の三人で話し合ううち、『ゼロ次元』では余りにも一般に分かりにくいので『0次現』、

27 名古屋青年美術と0次現はともに1960年に結成されているが、若者たちが新たに事を起こすにあたって、前年9月に東海地区に大きな被害をもたらした伊勢湾台風の影響を考慮してみることも必要かもしれない。下記を参照のこと。石崎尚「伊勢湾台風と美術」『アイチアートクロニクル1919-2019』愛知県美術館、2019年。

28 岩田と小岩が同学年、川口は1学年上。なお、日本美術会が主催する第6回日本アンデパンダン展（1953年2月22日から3月5日まで）に、川口は《ひめゆりの塔》を、岩田は《叫び》を出品している。川口が16歳、岩田が17歳の時である。

29 川口は前津中学校と名古屋市立工芸高校を卒業、梅田は若葉中学校と旭丘高校を卒業。また、加藤好弘も前津中学校に通っていたため、岩田らとは既にこの頃に出会っている。

ゼロの次に現すとした方が良いという意見が出て、『0次現』におちつきました。1960年6月5日の命名です。このことは自らに妥協した結果として、今に至るも悔やまれることと思っています。後に『ゼロ次元』として開催することになるわけですが、今思っても『ゼロ次元』以上の名称は思い浮かびません³⁰。

彼らの第1回展は、やはり愛知県文化会館美術館の1階B室で、1960年9月1日から9月4日まで開かれている。6月5日にグループ名称が決定してから3か月後の事である。この時の会場をおさめた写真が残っている（図15、16、17、18）。これを見ると梅田、小岩、川口がそれぞれ部屋の壁を一面ずつ用いて自作を展示していたことが分かる。梅田はアンフォルメル風の抽象絵画、川口は太陽のような円を大きく描いた作品、小岩は写真から推測する限りでは黒一面の絵画を出品しているように見える。川口の円を簡潔に描いた作品は、この会には参加していない岩田の、後の作品に近いものを感じさせる。

この時の芳名帳が残っており、後にゼロ次元のメンバーとなる水野光典と伊藤孝夫、桜画廊の藤田八栄子（1910-1993）、大竹睦啓³¹、加藤大博、岩原良仁、山田彊一（1938-）、岡田徹（1914-2007）、伊藤孝夫、沢木駒三郎³²、加藤好弘などの美術家、美術関係者らの名前が見られる他、愛知学芸大学や旭丘高校美術科など、学校単位での署名も見られる。また、「0次現 最低族 一致進モウ」「胸にグットきた」「無を有に為せ、有を無にせよ」「何が何んだかわからない、だが面白い」「常ニ無カラ出発シ タエズ鉦脈ヲサガス 芸術ノ大山師ガンバレ」「絵画とは何ぞや、気味を悪くさせるのは如何！」「わかるけどわかりません。でもスバラシイ！」「黄、黒の点滅キレイデシタ。アリガトウ」「0展に期待を掛けます」「メチャメチャのえズキ、おもしれえぞ」などの、感想も記されている。これらは0次現の作品に対する、市井の人々の生の反応であり、大変貴重な資料であると言えよう。

彼らの第2回展は名称をゼロ次現展に変えて、1961年10月21日から10月24日まで、愛知県文化会館美術館の2階14室から16室までの3室を使って行われた。前回から梅田が抜け、川口と小岩の2人展となり、サブタイトルに「96時間の無駄」を掲げた。興味深いのは、

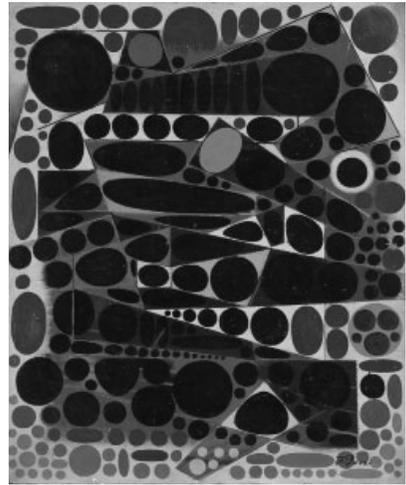


図14 吉川三伸《零次元的コントラストB》
1955年、名古屋市美術館蔵

30 「『ゼロ次元』前史 川口弘太郎氏に聞く」『裸眼ノート』No.1、美術雑誌『裸眼』編集部、1994年。なお、川口が目にしていただかどうかは定かではないが、0次現の結成から遡ること4年、『美術館ニュース窓口』に吉川三伸が「零次元絵画のレアリテ」という文章を寄せている。吉川は当時、内紛のあった美術文化協会を脱会し、松澤宥、古田晴久、小牧源太郎らとアルファ芸術陣を結成、愛知県文化会館美術館で度々展覧会を開催していた。吉川は当時の自作のタイトルにも零次元を冠している（図14）。『美術館ニュース窓口』第9号、愛知県文化会館美術館、1956年、4～5頁。

31 岩田信市は、0次現の創立メンバーを岩田、梅田、川口、小岩に大竹睦啓を加えた5人としているが、大竹は一度も展示には参加していない。前掲『『ゼロ次元』発生、活動、パワーの根源』10頁。

32 沢木は愛知県文化会館美術館の職員で、0次現の活動を評価してくれた人間として上記の『裸眼ノート』に名前が出てくる。芳名帳には「個は死んでいなかった。パレットを抱えるように、やはり絵筆を動かしていた。「まったく久し振りだな」と、クチビルの絵の具をこすった彼だった。」というコメントを残している。詩人としても活動していた沢木には下記の詩集がある。沢木駒三郎『夢の塔』路人詩社、1931年。



図15 撮影者不詳、第1回0次現展の屋外風景写真（左から梅田小岩川口）、1960年、個人蔵



図16 撮影者不詳、第1回0次現展の会場風景写真（川口弘太郎の作品）、1960年、個人蔵



図17 撮影者不詳、第1回0次現展の会場風景写真（自作の前の梅田正雄）、1960年、個人蔵



図18 撮影者不詳、第1回0次現展の会場風景写真（小岩高義の作品、中央が小岩本人）、1960年、個人蔵

川口がリング箱を使ったオブジェを出品したところ、当時はリング箱をゴミ箱として用いることが一般的だったため、ゴミ箱の展示を問題視した美術館から撤去要請が出たことである³³。最終的に撤去はされなかったものの、これは9年後に同じ愛知県文化会館美術館で起こるゴミ裁判³⁴を既に予見するかのようなエピソードである。当時の展評を引用する。

「小岩高義と川口弘太郎の二人展で副題に“96時間の無駄”とあるが何を意味するかよく

33 筆者による川口弘太郎へのインタビュー、2017年11月17日。

34 ゴミ裁判については下記を参照のこと。石崎尚「美術家たちの集団行動」『アイチアートクロニクル1919-2019』愛知県美術館、2019年。

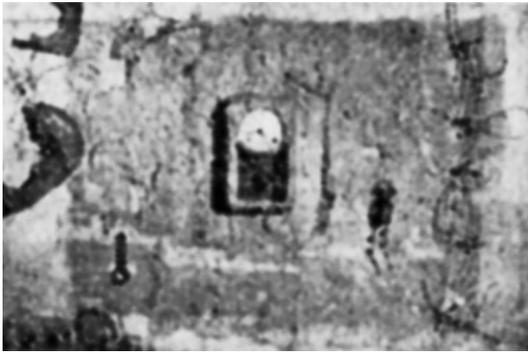


図19 第2回ゼロ次元展小岩の出品作、1961年、『中部日本新聞』1961年10月22日、7面より。

わからない。会場は絵画とオブジェがミックスした異様なふんい気が漂っている。一種のネオ・ダダイズムとでもいおうか。画面に古時計（動いている）がはめこまれ、クサリや電球や精密機械の部品が怪奇な生命をもってぶら下がっている。おまけに線香までにおっているからすごい³⁵。なお、記事には小岩の作品写真が掲載されている（図19）。

このようにリング箱のみならず線香も使用していたとすれば、それこそゴミ裁判で度々参照されることになる美術館の管理規定すれすれ（もしくは違反気味）の展示内容であったことが想像される。川口によればそもそも第1回展でも作品からコルタールの臭いが漂っていたというから、初回から既に過激さを漂わせていたようだ。

第2回展の芳名帳も半ば感想ノート、あるいは落書きノートと化しているが、目ぼしい来場者を拾うと、石井守、藤田八栄子、安井収蔵（1926-2017）、山田彊一、加藤好弘、波多野正、沢木駒三郎、加藤松雄（1935-）らの名前が見られる。感想は前回同様、賛否両論が寄せられているが前回に比べて「分からない」という感想や否定的な見解が多く、サブタイトルにかこつけて「25秒間の無駄」と自身の鑑賞体験を揶揄するようなコメントも記されている。

第3回展は1962年10月19日から10月25日まで、愛知県文化会館美術館2階14室から16室で行われた。案内ハガキに掲載されているグループ名は、この回からゼロ次元になっている。第2回展の二人に加えて岩田が入ったことにより3人展となる。特筆すべきは、小岩が箱の中でリングを食べるという行為が行われていることだ³⁶。これは後にハプニング集団として生まれ変わる以前の、初期のハプニングとして捉えることが可能である。残されている写真（図20）では、リングを食べてはいないものの、確かに小岩は箱に入っており、上にはリングが乗っている。芳名帳に記された感想から推測する限りでは、リング箱に色を塗って雑誌を貼ったものようだ。地面には紙が散乱しているから、ハプニングを行った後の写真なのかもしれない。また、作品の好きな場所に黒い印をつけろ、と鑑賞者に指示する作品もあったようだが確認できる写真は見つからない。恐らく白い板、もしくはカン

35 『中部日本新聞』1961年10月22日、7面。なお川口によれば96時間とは、4日間の会期を時間に換算したものだという。

36 前掲、黒ダライ兄『肉体のアナーキズム』、年譜042頁。



図20 撮影者不詳、第3回ゼロ次展の会場風景写真（箱の中の小岩）、1962年、個人蔵

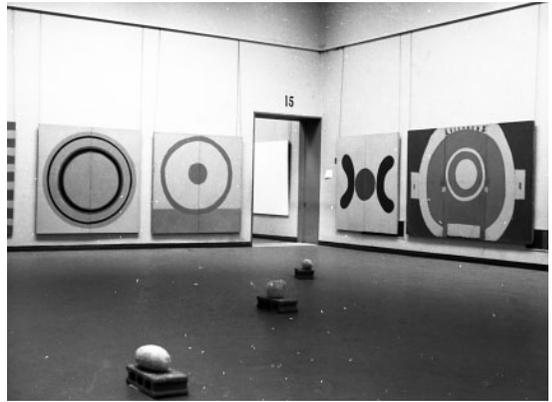


図21 撮影者不詳、第3回ゼロ次展の会場風景写真（岩田信市の絵画とブロックの上の石）、1962年、個人蔵

ヴァスの横に筆やペンなどを置いていたものと思われるが、これは現在の観客参加型の作品と同様の発想のものだろう。その他、岩田の作品かどうかは不明ながら、ブロックの上に丸みを帯びた石を置いたものを、壁面の岩田の作品と対比するように床に配置したのも見られる（図21）。この回の芳名帳には高橋皓子（1942-）、水谷勇夫（1922-2005）、藤島奨（1915-2002）、求正美、久野真、国島征二、小本章、我妻碧宇（1904-70）、伊藤孝夫、加藤大博、岡本信也（1940-）、加藤松雄、小池不可止（1906-89）、加藤好弘、水野光典、岡田徹、下郷羊雄（1907-81）、藤田八栄子らの名前が見られる。3回目では既に大家であった我妻碧宇や岡田徹をはじめ多くの美術関係者が訪れているので、彼らの活動に対する注目度が高まっていたのかもしれない。

クレージー・ナンセンス・グループの独立と0次現との合流

さて、ではその後、どのように名古屋青年美術と0次現が合流していったのだろうか。前述したように、1960年の初回の名古屋青年美術展のリーフレットには会員名簿が載っており、その中には既に梅田、川口、岩田、小岩らの0次現メンバーの名もあることから、この時点で少なくとも名簿上は彼らも名古屋青年美術に加入したことになる。この時の展評を引用しよう。

「文化ポスト 名古屋青年美術展 24日まで愛知県美術館。名古屋に住む20代の抽象画家たちの集まりで中区○○○○○○○加藤好弘氏が事務所。石黒鏘二（彫刻）、稲葉桂、加藤大博、小瀬垣宏郎、山田美瑛、梅村孝之氏ら描ける顔ぶれ。作品のできはともかく、元気にあふれたところが気持ちよい。写真は川口弘太郎氏の「石の顔」³⁷。

川口の《石の顔》の図版（図22）が掲載されているので、少なくとも川口はこの展覧会

37 『毎日新聞』中部本社版、1960年9月22日、7面。文中の一部を伏せ字に改めた。

に参加していたのは間違いない。時系列で二つのグループの動きを展覧会の開催日時をまとめると下記の表のようになる。

	名古屋青年美術	0次現（ゼロ次現、ゼロ次元）
1960年	9月19日～9月24日	9月1日～9月4日
1961年	1月1日～1月7日	10月21日～10月24日
1962年	1月1日～1月6日	10月19日～10月25日

川口が1960年の名古屋青年美術に参加していることから、加藤らは同年9月初旬の第1回0次現展で彼らの作品を見て、それからわずか数週間後の自分たちの展覧会にも0次現一派を誘い込んだことが分かる。これは第1回0次現展の芳名帳に加藤の名前があることから確かだろう。加藤らにとっても0次現の作品はインパクトのあるものだったことがうかがわれる。その後の名古屋青年美術の第2回、3回展に0次現グループが出品していたかどうかは不明だが、1962年に入って急速に両グループが接近したことは確かな様である。この年、例年通り正月に行われた名古屋青年美術展は、結果的に名古屋青年美術の展覧会としては最後のものとなった。

恐らくこの展覧会が終わってすぐの頃だと推測されるが、加藤を中心とする一部の抽象的、前衛的な傾向を持ったいわば精鋭部隊が、再び名古屋青年美術から分離・独立したようである。それが狂氣的ナンセンスグループと書いて、クレージー・ナンセンス・グループと読ませる集団である³⁸。このグループは独立後、すぐに0次現と合流してしまい短命に終わったこともあり、あまり資料は残っていない。しかし、翌63年1月1日から始まる狂氣的ナンセンス展のパンフレット（図23）には、CRAZY NONSENSE GROUPとして伊藤孝夫、岩下由紀子、加藤好弘、清島明、小瀬垣宏郎、鈴木孝（1937-2015）、元下巖、水野光典、成瀬光男、渡辺桂子という10名の氏名と住所が載っている。当然の事ながら事務局は今回も加藤が務めている。この中で岩下由紀子と鈴木孝は名古屋青年美術の名簿に名前がなかった新しいメンバーである。岩下は愛知学芸大学で伊藤孝夫の同級生、一方の鈴木孝は詩人で、同展パンフレットのほぼ全ページを占める詩「栄光への侮辱」の著者でもある³⁹。なお、翌年の狂氣的ナンセンス展のチラシも残っており（図24）、そこには伊藤孝夫、岩下由紀子、岩田信市、加藤好弘、小岩高義、水野光典、元下巖の7名の名前があり、パ

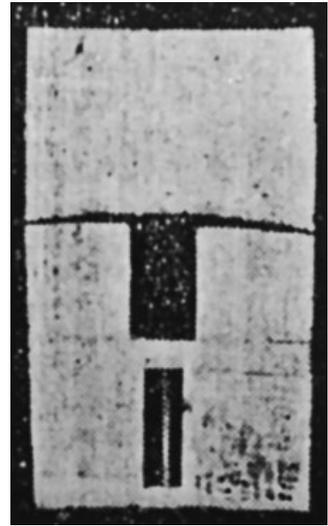


図22 川口弘太郎《石の顔》、1960年、『毎日新聞』中部本社版、1960年9月22日、7面より。

38 コミックバンドのクレージーキャッツは1955年に結成され、1961年にスーダラ節が大ヒットしたほか、いわゆるクレージー映画の第1作『ニッポン無責任時代』は1962年の夏に大ヒットしている。1962年という時期から考えて、これらクレージーキャッツの活躍がクレージー・ナンセンス・グループという名称と、破天荒なグループ活動に影響を与えた可能性は少なくないと考えられる。なお、植木等は1926年、名古屋生まれ。

39 ギョーム・アポリネールやフィリッポ・トンマーゾ・マリネッティの例を出すまでもなく、前衛美術と詩人は密接に関わってきた歴史があるが、九州派において詩人の俣野衛が機関誌の発行を推進したように、日本の戦後前衛美術においても詩人たちとの結び付きは再検討すべき課題である。なお、鈴木孝と内藤圭介は同じ愛知県高浜市在住で早い時期から交流があった。また、1964年の日本超芸術見本市展のパンフレットには、歌人の春日井建が寄稿している。



図23 狂気のナンセンス展パンフレット表紙、1963年、個人蔵

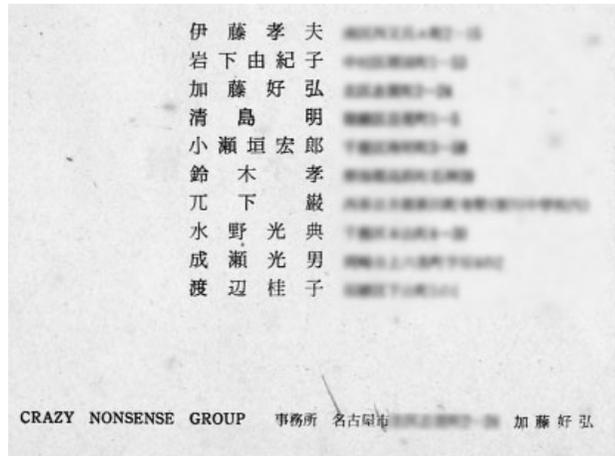


図23 同パンフレット（3頁目、部分）

ンフレットとは異なっている。具体的にはパンフレットに載っている10名の内、清島明、小瀬垣宏郎、鈴木孝、成瀬光男、渡辺桂子の5名が抜け、岩田信市、小岩高義の2名が加わっている。おそらく、パンフレットを入稿後から翌年の展覧会までのどこかの時点で5名が抜け、その代わりにその頃に親交を深めていた0次現グループの2名を加入させたのだと推測される。川口弘太郎や高橋皓子の名前が無いことを別にすれば、このメンバーがそのままハプニング集団として生まれ変わったゼロ次元になったと考えて良いだろう。しかしながら、這いずりハプニングに際して配布されたと思しきチラシ（図2）には、「主宰 狂気のナンセンスGROUP 協参 0次元」という表記があり、1963年の年頭においてもまだ両グループは完全には合流していなかったと考えられる。

もう一つ、クレージー・ナンセンス・グループの存在を示す資料がある⁴⁰。1965年5月9日から5月13日まで、名古屋の桜画廊で開かれたゼロ次元の「忘れられた部屋」展に関するインタビューに、岩田信市と高橋皓子が答えている。

岩田 はじめたのは5、6年前。ちょうど前衛芸術はなやかりしころだったね。

高橋 わたしはやはり同じ前衛芸術のグループのクレージー・ナンセンスの一員だった

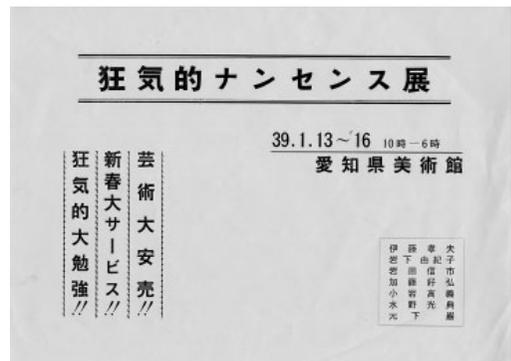


図24 狂気のナンセンス展チラシ、1964年、個人蔵

40 『中部経済新聞』、1965年5月30日。

んだけれど、ゼロ次元グループと合同したので一緒に仕事をするようになった。

これはクレージー・ナンセンス・グループとゼロ次元が合流したことを簡潔に伝える受け答えである。「名古屋青年美術展」や「0次現展」などのように、当時はグループ名をそのまま展覧会名にするのが通例であったことを考えれば、1963年1月の「狂氣的ナンセンス」という展覧会名は、そのまま当時の彼らのグループ名であったと考えるべきだろう。高橋の名前は名古屋青年美術の名簿には載っていないので、クレージー・ナンセンス・グループとして独立した後高橋が加入したのだと推測される。

1962年1月の名古屋青年美術展以降、クレージー・ナンセンス・グループがどのタイミングで独立したのか正確な日時は明らかではないが、いずれにせよ1962年にはクレージー・ナンセンスと0次現の両グループに所属する作家たちの共演が相次いでいる。以下、関連する項目を列挙するが、この中で◎印をつけたものが両グループのメンバーが共演しているものである⁴¹。

1962年2月2日～2月8日	加藤好弘・兀下巖二人展（毎日ビル銘菓センター／名古屋）
◎1962年3月2日～3月16日	第14回読売アンデパンダン展
1962年7月13日～7月18日	岩田信市個展（村松画廊／銀座）
1962年7月13日～7月18日	小岩高義個展（村松画廊／銀座）
◎1962年8月	茶室の儀式（後の加藤夫人の実家／名古屋）
1962年10月19日～10月25日	第3回ゼロ次元展（愛知県文化会館美術館／名古屋）
◎1962年11月12日	加藤の結婚式（丸善の隣の寿司屋／名古屋）
1962年11月23日	音と男色と花ふぶきによる集団混合儀式（空き地／名古屋）

この年の活動の傾向として、2月の加藤と兀下の二人展、7月の岩田と小岩の個展、そして10月の第3回ゼロ次元展と、作品の発表としての展覧会はそれぞれのグループのメンバーが単独で行っているものの、それ以外のいわゆるイベント的な性格の催しに関しては交流がかなり進んでいる。3月の第14回読売アンデパンダン展には、0次現の岩田、クレージー・ナンセンスの加藤が参加⁴²。8月に非公開で行われた「茶室の儀式」には、0次現の岩田、小岩が、クレージー・ナンセンスの加藤、伊藤、水野と共に参加。11月の加藤の結婚式には、クレージー・ナンセンスの伊藤孝夫、岩下由紀子、鈴木孝、高橋皓子、兀下巖、水野光典、渡辺桂子に加えて、0次現の川口、小岩が参加。11月23日の「音と男色と花ふぶきによる集団混合儀式」に参加したメンバーは明らかではないので、両グループが同席していたかどうかは確認できない。なお、2つのグループが接近して行く最中の1962年10月に

41 イベントの日時や参加者については下記を参照した。前掲、黒グライ兒『肉体のアナーキズム』、年譜038-044頁。

42 後期の読売アンデパンダン展には名古屋青年美術、あるいは0次現のメンバーによる出品が見られる。ここでは後のゼロ次元に参加した作家のみ、目録などで確認できるものを挙げておく。●第13回展（1961年3月）加藤好弘：《白と青と黄》、《赤と青と白》／兀下巖《中有の世界 38》、《中有の世界 39》、《中有の世界 40》●第14回展（1962年3月）岩田信市：《作品一》、《作品二》、《作品三》、《作品四》、《作品五》／加藤好弘：《黒の中の赤のマル・黒の中の赤のマル・黒の中の赤のマル・黒の中の白のマル》●第15回展（1963年3月）岩田信市：《黙って抱いて》、《死んでもいい》、《あいつばかりが何故もてる》、《太陽はひとりぼっち》／加藤好弘：《ある入滅式マンダラ（3/10変革儀式1）》、《黒のエロス（3/10変革儀式2）》、《三月十日変革儀式神器具1》、《三月十日変革儀式神器具2》。

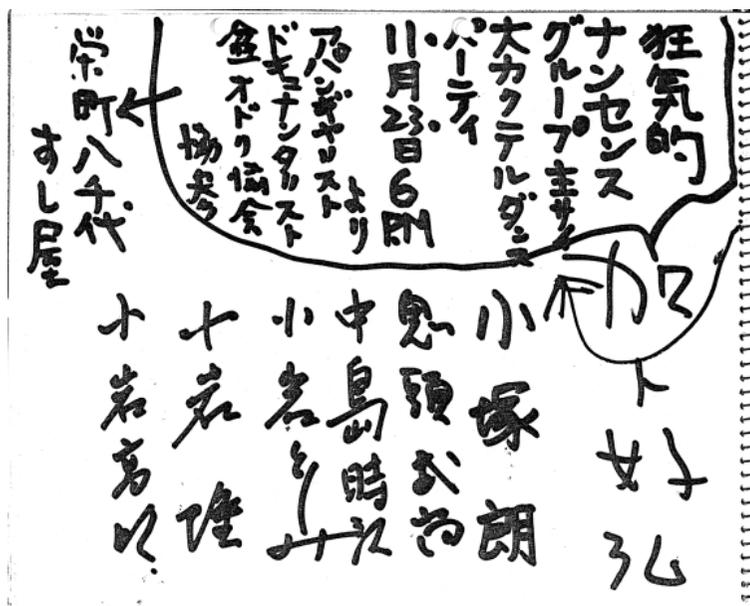


図25 第3回ゼロ次元展の芳名帳（写し）、1962年、個人蔵

行われた第3回ゼロ次元展に、クレージー・ナンセンス側の加藤らは参加していないが、芳名帳には加藤好弘の名前の上に、以下のような書き込みが残されている（図25）。

狂氣的ナンセンスグループ主サイ大カクテルダンスパーティー
 11月23日6P.Mより
 アバンギャリストドキュメンタリスト盆オドリ協会協参
 柴町八千代すし屋

他人の展覧会の芳名帳を、自分たちのイベントの告知に使うというのは実に加藤らしいが、逆に言えばこのような書き込みをする程、当時クレージー・ナンセンス・グループと0次現の交流が進んでいたのだろう。この展覧会が終わって約2か月後、すなわち1963年1月1日の這いずりをもって、ハプニング集団として生まれ変わった新しいグループ、ゼロ次元がスタートする。

ここまで述べてきたようにゼロ次元は、多摩美術大学に端を発する青年美術家協会から分離、独立を繰り返して生まれたクレージー・ナンセンス・グループという流れと、前津中学校と旭丘高校の卒業生が集まって出来た0次現という二つの流れが最終的に合流して生まれたグループだということが明らかになった。仮にこれをキーワード的に端的に記述するならば、「ゼロ次元は、青年美術家協会および名古屋青年美術というグループを母体に、加藤好弘、元下巖らが1962年頃に結成したクレージー・ナンセンス・グループと、川口弘太郎、岩田信市らが1960年に結成した0次現（後にゼロ次元に改称）という二つのグループが、1962年頃に合流して出来上がった前衛ハプニング集団である」ということになるだろう。

青年美術家協会および名古屋青年美術は、前衛的な作家も団体展の作家も共存する、ある意味ではカオス状態の集団ではあったが、この積乱雲のように若手作家のパワーが渦巻くグループの中から、徐々に先鋭的な意識を持つ作家たちが析出され、そして0次元の化学反応によってゼロ次元が生まれたのである。これまで、ゼロ次元の結成年に諸説が入り乱れていたのは、青年美術家協会や名古屋青年美術など様々な集団の設立年が混同されてきたからであろう。そして恐らく、歴史のある団体であることを誇示するため設立年を早く設定したいという欲望⁴³、半ばグループの乗っ取りのような経緯についての後ろめたさ、さらには前後関係を説明する際の煩雑さなどもあり、ゼロ次元の当事者側も積極的にはこのあたりの事情を詳らかにしなかったのではないかと推測される。

ゼロ次元前史の意義

先述したように、ゼロ次元は複数のグループが複雑に絡み合っただけで生まれた集団だが、戦後美術史におけるその真の重要性は、1963年にハプニング集団となって以降のゼロ次元にあるのであって、それ以前の活動は取るに足らないとする立場もあるかもしれない。そのため、以下ではゼロ次元の前史に注目すべき理由について述べておきたい。

第一に愛知の美術の流れの中でゼロ次元を捉えることの重要性である。ゼロ次元の母体の一つである青年美術家協会および名古屋青年美術は、戦後の比較的早い時期に結成された横断的な美術団体である。後のゼロ次元に参加した作家たち以外にも、石黒鏘二、稲葉桂、加藤大博、岸本清子、内藤圭介ら当時参加していたメンバーは愛知の現代美術界において重要な役割を果たした作家たちである。同時に、鶴見雅夫、成瀬光男、佐々木豊らはいわゆる公募団体に所属しながら独自の画風を確立し、美術教育においても功績のある作家たちである。こうした団体に属する作家たちと、いわゆる前衛系の作家たちが同じ集団に参加してともに展覧会活動を行っていたという事実は大変に興味深い。

東海地方では1946年に、地域の作家がほとんど関わる形で中部日本美術協会が発足し、1955年まで継続していた。団体の垣根を越えて、美術作家が大同団結して運動を起こしている状況は、地方の美術シーンならでは長所だと言えるが、名古屋青年美術はある意味では中部日本美術協会の若手作家版とも言うべき、若い作家が会派を超えて集まった集団であった。このように大規模かつ広範囲にわたる集団は、愛知の戦後美術の中では極めて珍しく、そのこと自体がこのグループを重要なものにしていく⁴⁴。また、青年美術家協会には小華和為雄、福本智雄、光延博愛など、後にアニメーション業界で活躍する作家が複数参加している⁴⁵。これは当時、多摩美術大学の学生で、東映動画のアルバイトをしていた者が多かったことから、そのまま卒業後も職業として関わり続けるケースがあったのだと

43 例えば青年美術家協会展の名古屋巡回を準備していた1958年を設立年とすれば、ネオダダ（1960年結成）やハイレッド・センター（1963年結成）よりも古い集団となるだろう。岩田や小岩は旭丘高校で荒川修作、赤瀬川原平と親しかったため、彼らに対する対抗意識が働いたとしても不思議はない。

44 同時期には前衛集団（1955年頃結成）、YAG（1964年結成）などのグループも生まれていたが、どちらも愛知学芸大学関係者によるグループであり、人脈の広がりという点では名古屋青年美術に見劣りするの否めない。その点、註30で言及したアルファ芸術陣（1954年結成）は、若手作家だけのグループではないが、中部東海圏にとどまらない幅広い地域の作家が参加した点で、名古屋青年美術に先立つ重要な動向といえる。

45 福住廉は小林七郎について論じる中で、戦後のアニメーションと前衛美術の関係性について指摘している。またその中で、福本智雄がジャックの会の佐々木耕成を誘って東映動画に引き入れたことにも言及している。福住廉「アニメーションとアヴァンギャルド——小林七郎が体現する『前衛精神』」、<https://repre.org/repre/vol18/special/note2.php>（2019年2月4日閲覧）

推測される⁴⁶。このように、後に様々な方向へ進む画家たちが、一時期同じ集団に属して発表活動を行い、切磋琢磨し刺激し合っていたことはほとんど知られていなかった。ゼロ次元やVAVAのメンバーも参加する一方で、いわゆる画壇の重鎮作家や、さらにはアニメーション関係者も輩出した青年美術家協会と名古屋青年美術は、戦後美術の多層性を持つと同時に、愛知の美術史における豊かな水脈をも感じさせる集団である。これらの集団について論じた研究はこれまで皆無に等しかったが、地方における美術史に注目が集まる近年では、その重要性はますます高まっているというべきであろう⁴⁷。

と同時に、ゼロ次元は愛知だけで活動した美術集団ではなく、1964年以降は東京でも活発にハプニングを展開した、その意味で東京の美術シーンとも密接に関わる集団である。つまり、ゼロ次元を愛知の美術の流れの中で再検証することは、ただ単に地方の前衛集団をローカルな文脈で読み解くことではなく、同時に東京の美術シーンとも接続させながらこのグループの活動を再確認できるということの意味する。これはともすると自閉してしまいがちな郷土の美術史に、同時代性という大きな風穴を開けて考察することが可能な、大きなメリットであろう。

第二に、いくつもの団体が離合集散して出来上がったという成立過程も、ゼロ次元というグループを考えるにあたっては無視することの出来ない意味を持っている。ゼロ次元はハプニング集団として生まれ変わった後も、東京グループと愛知グループに分かれて二派活動を行い、新たにシンバが現れればその都度メンバーに加えるなど、常に高い流動性を維持していた。この運営方法が約10年間という、ハプニング集団としては驚異的に長い期間に渡って活動を続けることを可能にしたのだ。メンバーを入れ替えることで新陳代謝をもたらした集団に活力を与えるこの手法は、既にゼロ次元の結成以前に青年美術家協会、名古屋青年美術、クレージー・ナンセンス・グループと変遷し、そして最後に0次現と合流するまでの間に、とりわけ稀代のオーガナイザーであった加藤好弘の中に確立されていたというべきだろう。また、ゼロ次元はその活動の後期に当たる1969年に、告陰、ビタミン・アート、新宿少年団などのグループと糾合して万博破壊共闘派を立ち上げたが、新たな名称の下に複数の集団を一つにまとめ上げる戦略には、ゼロ次元結成以前の動きとの共通点がある。つまり、ゼロ次元の成立過程に注目することは、流動性の高いグループの運営を行ったゼロ次元の本質について考える上で欠かせないことなのである。

第三に、ゼロ次元という集団をある種の継続性の中で考察する必要がある。加藤好弘、元下巖、川口弘太郎、岩田信市、小岩高義といった初期ゼロ次元の中心メンバーの活動に着目した時に明らかになるのは、彼らが純然たる画家としてキャリアを出発させ、絵画のグループを結成して活動していたという事実である。彼らのハプニング的な要素は、絵画を展示する際に線香や時計を用いて人々に驚きを与えるために始まっている。また、度々言及される1963年元旦の這いずりハプニングも、そもそもは愛知県文化会館美術館で開催している彼らの展覧会に観客を動員するための人寄せのイベントであった。つまり彼らのハプニングとは、絵画の展示に何らかの新奇さを加えるために始まったことだと言えるだろう。こうしたことは、1963年に突如としてゼロ次元というハプニング集団が誕生した、

46 筆者による内藤圭介へのインタビュー、2018年4月20日。

47 例えば全国美術館会議には2014年に地域美術研究部会が創設されている。また、『美術フォーラム21』第37号（醍醐書房、2018年）は地方美術史を特集している。

という語り口からは抜け落ちてしまうものである。

なお前章では、1962年にクレージー・ナンセンス・グループと0次現グループが急接近していく過程について、作品展はそれぞれのグループで行い、それ以外のイベントは両グループが参加したことを指摘した。この時期の二種類の活動は、個人制作による静的なオブジェ（絵画作品）の展示と、集団制作（演技）による動的なハプニングの発表、というように図式的に分類することが可能だろう。そして結局のところゼロ次元とは、1963年という時点において個の観念と感性に立脚した前者の活動を切り捨て、「カクテルダンスパーティ」のようにある意味では大学のサークル活動のような催しにのめり込んでいったグループであると言えるだろう⁴⁸。日本のハプニング史におけるゼロ次元の功績は疑いようもないが、しかし一方で彼らの初期のハプニングには（メンバーの多くは社会人であったものの）、どことなく学生サークルの悪ノリを感じさせる乱痴気騒ぎのような側面があったのもまた事実なのである。こうした点もまたゼロ次元の活動を考察する際には見逃せない点なのだが、それは結成以前の動きをつぶさに追うことで改めて浮かび上がってくるものなのだ。

おわりに

本論では、ハプニング集団ゼロ次元がどのように生まれたのかを明らかにするために、ゼロ次元結成までの過程を振り返ってきた。従来、ゼロ次元はその活動の特異性から、愛知の美術史との関連で論じられる機会が少なく、ともすると突然変異のように愛知・名古屋の地に生まれ出てきたように捉えられるきらいがあった。今回述べた結成の経緯によって、彼らが戦後愛知の美術シーンと深く関わっていることが明らかになったのではないだろうか。同時に、愛知県文化会館美術館の果たした役割も再確認できたと思う。1955年に名古屋・栄の中心地に開館した同館は、当時としては十分な広さを持った展示スペースとして、戦後の復興とともに日増しに高まっていく人々の創作意欲を受け止めていった。その際にこの美術館が、原則として個人へは貸し出しをせず、グループにのみスペースを貸し出したことが⁴⁹、間接的に愛知県内に多くの美術グループを生み出すきっかけになったと言えるだろう。青年美術家協会の名古屋巡回展、名古屋青年美術展、そして0次現展は全てこの美術館の展示室で開催されている。愛知県文化会館美術館のコレクションを引き継いだ現在の愛知県美術館がゼロ次元を研究するのは、この自分たちの歴史を再確認するためにも必要なことであろう。

戦後の地方の前衛美術集団については、近年、公立美術館による再評価の試みが相次い

48 そして個人による絵画制作を切り捨てたことが、川口弘太郎、兀下巖、伊藤孝夫らの初期メンバーがグループを離れるきっかけになったこともまた事実である。それぞれ筆者によるインタビュー。川口弘太郎、2017年11月17日。兀下巖、2017年12月7日。伊藤孝夫、2017年12月21日。

49 これは愛知県文化会館条例及び同規則、愛知県文化会館規則に明記されている訳ではないが、『美術館ニュース窓口』などに掲載されている展覧会案内を見る限り、新聞社の主催する大物画家の個展などのごく一部の例を除けば、実質的には個人への貸し出しを行っていなかったのは明らかである。

でいる⁵⁰。これに比べてゼロ次元を検証する動きはかなり遅れていると言えるが、今後研究を進めて行くためにも、手始めにグループの結成に関する経緯を明らかにすることを試みた。ゼロ次元前史、つまり本格的なハプニング集団として出発するまでの動きについては本論で多少なりとも明らかにしたと思う。ゼロ次元結成以後の動向については、また稿を改めたい。

本論の執筆にあたっては多くの方々のご協力を得た。愛知県美術館が所蔵するゼロ次元関連資料は収集から保存、整理に至るまで実に手間のかかるものであった。ここまで研究を進めることが出来たのは、偏に同僚の手助けがあったからである。また、膨大な写真資料を整理し、デジタル化していく作業では脇屋佳秀子のご助力が欠かせなかった。この場を借りてお礼を申し上げる。さらに下記の方々には資料提供、インタビュー調査などご協力を賜った。浅井玉雄、飯田慈子、石井守、井上哲夫、伊藤孝夫、梅田正雄、岡本信也、岡本靖子、加藤大博、加藤好弘、金井勝、川口弘太郎、黒ダライ兒、坂上しのぶ、高橋綾子、高橋皓子、筒井宏樹、内藤圭介、成瀬光男、兀下巖、原智彦、古田一晴、細谷修平、正木基、安井美星、山田彊一、山田諭の各氏の名をここに記して、心からの感謝の意を表したい。また、本論の元になった調査の最中に岩田信市、加藤好弘の両氏が亡くなられた。作品の収蔵やインタビュー調査で大変にお世話になった両氏の、ご冥福を祈るばかりである。

なお、本論の元になった研究には、公益財団法人ポーラ美術振興財団と美術館連絡協議会美術館活動助成からの助成を賜った。深甚な謝意を表する。

50 主なものを下記に掲げておく。「GUN 新潟に前衛があった頃」(新潟県立近代美術館、2012-13年)、「グループ『幻触』と石子順造 1960-1971」(静岡県立美術館、2014年)、「群馬NOMOグループの全貌」(群馬県立近代美術館、2016年)、「THE PLAY since 1967 まだ見ぬ流れの彼方へ」(国立国際美術館、2016-17年)。また「森山安英 解体と再生」(北九州市立美術館、2018年)、「変革の煽動者 佐々木耕成アーカイブ」(熊本県立美術館、2018年)の2つの展覧会は、公立美術館での紹介がしにくい反芸術的な傾向の強い作家を取り上げたという点で、実に画期的であった。